



史女子ヤツ下山



史女子秀葉千

# 山下ツヤ子女史と

## 千葉秀子女史

土川 五郎

し後進の途を開かんこの心が切であつたために、自ら職を  
辞された。茲に尊い影が見える。

幼児教育編輯から兩女史の事を物せよと申越された。私  
は到底兩女史の事を知り盡して居ない、唯其一端を見た  
けである、尙其奥に大なるものがあるかも知れない、もし  
知る人があらば聞かせていたゞきたい、併し兩女史は何れ  
も幼児教育界の功勞者であることは誰もいなめない事であ  
る。唯兩女史の個性が全く異なつた兩方面に輝いて居るこ  
ろは又大いに幼児教育界に裨益した事であらう。

四谷幼稚園長山下ツヤ子女史と朝海幼稚園長千葉秀子女  
史とは今回退職せられました。これは本市保育界の大なる損  
失であります。女史等は老齡さはいへ、まだくゞ矍鑠たる  
もので十分に幼児教育に當られる餘力ある人であつた。併

## 山下ツヤ子女史

## 女史の略歴

女史は明治元年七月二十日の出生、小學校時代を下谷根岸で、十四年六月から七年間桐生私學校で漢籍を専攻された、二十年九月から十二年間は小山作之助について音楽を修められ、二十二年四月に東京府教育會保姆傳習所を卒業小學校專科正教員を保姆免許狀を得られた。

職務としては明治二十二年九月本市富士見小學校唱歌訓導兼附屬幼稚園保姆となり、三十九年六月同幼稚園保姆專任となり、四十五年三月迄在職二十二年七月、同月本市朝海幼稚園保姆に轉じ、大正二年三月本市四谷幼稚園新設に當り保姆兼園長に就任、昭和八年四月十日老齡且後進の途を開かんことを決心固く退職せられた、勤続前後通じて實に四十三年八月月の長き間幼児教育に盡された功績は實に大きい、文部省帝國教育會全國保育大會、市教育會區教育會より表彰を受けられた事十數回。

女史は幼稚園界に四十有餘年、終始一貫其職務に忠實で

幼児を心から愛さるゝ慈母の如くであつた、保姆を統御する事、一の策略なく誠心誠意を以て當られたので皆快く任務を遂行し得られたこと云ふ事である。

性、竹を割つた如くさつぱりさして、思ふた事はすんずん云つて、小言も云つたり叱るこももあるが、あこはクロリと晴れて後に残らない人。

幼児を思ひ職務を忽せにしない逸事も澤山あるが、近く昨年十一月四谷區小學校聯合の運動會が、明治神宮外苑に行はれた、幼稚園も參加して遊戯をやる事になつて居る、時恰も女史は病氣にかゝり可なりの高い熱があり、數日食を一つも口に入るゝ事が出来なかつた、醫師は絶對安靜を命じた、女史はひそかに車で園に行き幼児と共に會場に行き、何かれを指揮をして遊戯が終るゝ又車で歸り床に入られた、氣を以て病を壓する信念があつたので幸に旬日ならずして快くなつたといふ事である。

女史は又親孝行で有名であつた、母のために自分の一生を犠牲にして孝養を盡された、母の在ます内は自分の好むものも母好まざるものは一切口にせず、母の好まざるもの

## 千葉秀子女史

### 女史の略歴

女史は明治五年十月十一日生、三十一年三月東京府教育會保姆傳習所を卒業、三十二年横須賀小學校附屬幼稚園保姆として専科(唱歌)も兼ねて就任、三十三年十月日本橋坂本小學校附屬幼稚園主任となり、三十六年六月十日京橋朝海小學校附屬幼稚園に轉じ、四十四年五月朝海幼稚園が獨立して園長となり、本年七月山下女史と同じく老齡を後進者のために朝海幼稚園在職三十年を期して退職せられた。勤続前後通じて三十有餘年の長き幼児教育に盡された功績は、筆に盡す事が出来ない、山下氏と同じく文部省帝國教育會、全國保育大會、市教育會、區教育會から表彰を受けられた事十數回に及ぶ。

女史は幼稚園界に三十有餘年終始一貫よく其職務に忠實に幼児にも保姆にも實によく盡され、朝海の名聲を今日迄持たれた。

女史は内によく盡されたが、又外に向つて働きかけられ

は一切見る事を敢てせず、又恩師田中ふさ子女史に對しても實によく盡し、恩師死去せられた後は亡母亡師の命日には、墓參を缺いた事はなく、又何か人から贈られたものには、必ず先づ其寫眞に供へ、生ける人にも云ふ如く、報告をするのが常であつた、近く甲辰保育會から記念品を贈つたら、其返信を手に入れたから一寸記しませう。

本日時計松屋より送り届けられました。深きお心入れに依り、實にく結構なる立派なる好個の記念品、みな様の御厚意を先生の御心からのおゑらみにて、眞に勿體なき心ちいたし、早速自分の居室にて、故先生亡母の見えるころにかけて報告致しました。先生もぎのやうにお喜び下さいましたこと、存じます。母もさぞかしよろこびお禮を申してをりませう。(以下略す)

女史が常に神佛に對し深い尊敬を信仰を持たれたのこ、若い時の漢籍の修養が、其人物を作りこれが源泉となつて保育に及ぼした事存じます。

る事が多かつた、又屢々苦境に立つてよく不撓不屈以て之れを能く征服された、彼の四十二年二月十八日學校に幼稚園が火災に罹つて全焼した、中屋印刷所の跡に假すまひ、油くさき中に職員を督勵して幼児を收容し、保育を遂行された時、かの大正十二年の震災の時の悲惨な厄をしみじく味つて、其中で夜おそく迄連日保育の準備に一身を捧げられた時、實に常人では堪えられない困難を突破された。

此の二大厄にいつも伴つて起る問題の幼稚園廢止の聲である、無理解な議員はいつも廢止を強調した、女史は其都度奮起して寢食を忘れて、外部の接渉に當つて遂に今日を見るに至つた、これには女史の夫君、武氏がよく職務に理解を持ち、女史に十分な餘力を與へて活躍を妨げなかつた事が女史の今日ある因であつた、又東京市保育會幹部としても甲辰保育會の元老としても實によく盡された。

女史は所謂世話好きであつた、義侠心のある人であつた、頼まれるこいやき云へない質であつた、従つて女史の恩惠によつて今日をなした保姆も澤山にあるこいふ事である。

## 秋寸詠

よしこ

たけ高き一も梧桐はすえの上枝しやえさはぎ下枝しやえさはきて秋は來にけり

青の空にばかり一刷け浮雲のしろき動きをあかずもながめり

地上五寸 櫛の若木あけに朱あけに染み黄に染みたり一丁がほぎ(東京市苗圃にて)

つとめ持ちてあればわが子に對して

よの母に及びがたきを思ふ故に いさゝかこもかりそめこせず